
境界の輪廻

柳沢 白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

境界の輪廻

【Nコード】

N85090

【作者名】

柳沢 白

【あらすじ】

「リマークブル」とよばれる人種、「ワイプ」と呼ばれる人種、「政府」とよばれる者たち……。

不思議な三角関係がありなす不思議な六角関係。

一・闇の中で

……どこか遠くで名前を呼ぶ声がする。

思い出さなければいけない……そんな気がした。

どこか遠くでふくろうの鳴き声がする。

優しく包み込むように、柔らかい音が。

一つ鳴き、二つ鳴き、三つ目は遮られた。

——発砲音によって。

二秒後に聞こえたのは、何かの地に落ちた音と子供たちの歓声と、

『今日のご飯はこれで決まりだね！』

無邪気な笑い声と下品な大人の笑い声だった。

風が強く吹いて、草木を揺らした。

……またか。

風が止む頃には、無邪気な笑い声も下品な笑い声も止んだ。

代わりに、その場には首だけが落ちていた。

二・朝の霧

朝、目が覚めて夜眠るのは当たり前前の事だろう。

時計をみれば、とつくに起きなくてはならない時間だった。

「仕方がない……起きるか」

まだ動きの鈍い体を無理やり起こして、身支度を整えた。

「きつとカノンも気づいただろうな」

そう呟くと、彼はゆつくりと家をでた。

そして案の定、カノンは家の前に立っていた。

「遅い！ 今日こそもつと大きな手掛かりを手にいれるの！」

「昨日の夜の騒ぎで眠れなかったん……」

「そんな言い訳は聞かないよ！ 私の家の方が近かったんだからね！」

言葉を遮られて言い訳もできないのも案の定。

膨れっ面のまま、カノンは歩き始めた。

しばらくぶつぶつと文句を言いながら歩いていたが、

「ちゃんとヴァンが朝起きないからいけないんだよ？」

だいぶ落ち着いてきたのか、言葉に棘がなくなり始めた。

「次から気をつけるよ」

苦笑いしながら答えると、満足したのか彼女の顔に笑顔が見え始めた。

昨日の夜ご飯はどっちが豪華だの他愛のない話をしながら、

昨日から脳裏に焼きついている映像のある場所までやってきた。

「……また……なんだね」

突然、カノンは悲しそうに俯き言った。

「ああ……また助けられなかった。」

そこにはふくろうが一羽、人間の首が五つ落ちていた。

「みつからないうちに片付けよう」

「リマークブルとして、必ずいつか……」

二人はポツリと呟いた。

ヴァンは、一つ首を拾った。

生きていた時の温かさなど微塵も感じ取れなく、

血液が一滴もないのか、顔は真っ青だった。

しかしその顔は笑顔で、太陽は空の真ん中で輝いていた。

「ほら、カノン……？」

フクロウの死骸を手渡すと、小さく頷いてソレを受け取った。

片づけが終わったのは、それからすぐのことだった。

三・セネラル

俺達は首やフクロウの死骸を？引き換える？ために、
現在地のすぐそばにある町を目指した。

そこからしばらく歩いたところに、小さな町はあった。

「セネラル……？ 聞いたことのない町だね」

「でも？引換所？があればいいじゃん！」

あれだけ重かったカノンの足取りも、セネラルに着く頃にはすでに
軽くなり、
嬉しそうに笑っていた。

この町に着いてからは、ひとまず？引換所？に行く決めていた。
彼女の機嫌が悪くならないうちに、それが本音だ。

「……やっぱり、じろじろ見られるのは好きになれないなあ」
ため息交じりの呟きが雑踏の中で聞こえた。

「あれがりマークブル？」

「まだ若いわねえ…… 本当に人の……」

「おい！ それ以上は……」

「私達まで……られちゃうわ、あれが……？」

「あんまり……次の……れるぞ」

「そうね、さつさと……」

あたりを見渡すと、こっちを見ながらひそひそと話す中年の夫婦
を見つけた。

目が合ったので軽く会釈すると、

「殺される」

小さく、怯えたように一言残して彼らは小走りに逃げに行った。

「誰がいつ人を殺したって言うんだよ」

苛立ちを隠せずにいると、何か変なオーラでもでているのか周りの人々が避けていくのがわかった。

「ヴァン？ 落ち着いて？」

彼女に言われて、やっと頭に血が昇るのが収まった……気がした。そういえば何も考えずに歩いていたけど、ここはどこなんだろう？ふと我に返り、左を歩いているカノンを見ると右斜め後方を指差した。

「行き過ぎたよ？」

笑いを堪えている彼女を見て、ここまで失笑したのは何年ぶりだろうか。

いや、初めてであって欲しいと、笑っている彼女の横で切に願っていた。

四・引換所 前

カランと小さな音を立てて開いた扉は頑丈で、細部まで凝ったデザインだった。

「ここはリマークブル以外立ち入り禁止だよ」

カウンターに立っている屈強そうな男に言われ、

「アカビアンナ」

二人は扉の閉まった事を確認してから言った。

男は頷きながらオーエンと言った。

「それにしてもめんどくせえよな！ いちいち合言葉なんか言わなきゃなんねんだよ」

「でもそれが決まりですから」

カノンが微笑みながら言う、男は真面目だねえと苦笑いした。

「今日は？ 引換？ をしてもらったために……」

——来ました。と言いかけて、話を遮られた。

「その前に自己紹介だ！ 俺はエレン！ 当たり前だが政府の人間だ！」

次はお前！と言わんばかりの熱視線を俺に送るエレン。

カノンも呆れている。

心の中で深いため息をつき、

「ヴァン、生まれた時からリマークブル。 48区担当だ」

とだけ答えた。

「カノン、同じくリマークブルで、48区担当です」

続けざまに自己紹介というか名前紹介を終えると、

エレンがまた話し始めた。

「実はな、この町はできてまだ半年しか経たねえ。

あんたらがこの町では初めてのリマークブルなんだよ」

そしてエレンは少し悲しそうな顔をして言った。

「この町でも噂は変わらねえよ」

一番よく聞く噂は、

リマークブルは頭の中に思い描いた人を殺せる、というものだ。

——だけど実際はまったくそんなことはない。

俺らは殺せるんじゃない、殺される瞬間がみえるんだ。

それも事故とかじゃなく、リマークブルの間で呼ばれる名前だが、
？ワイプ？と呼ばれる人間達によって。

しかもただ殺すんじゃないくて、食べるんだ。

首から下……限定で。

だから彼らの？食後？には、首から上しか残らない。

俺はそんな奴らが許せない。

同じ人として、人間として。

人間を残酷に殺すことに快感を覚え、食べることに快感を覚える。

なんのために俺らに殺す瞬間をみせる。

なんのために残った頭部を回収させる。

なんで奴らの情報は頭部や動物の死骸を通さなきゃ得られないんだ。

五・引換所 後

俺とカノン……正確にはリマークブルは、そんな死体の回収をし
ながら情報を集めている。

引換所に行き、政府に首を渡して情報の書かれた紙をもらう。
ただの白い紙に見えるらしいが、俺らにはしっかりと言葉が書い
てあるのが見えるんだ。

引換所にいる政府は、ワイプに殺された善良な人間しかなれない
らしく、

もう一度生き返れる代わりに一生痛みも感じられなく、死ぬこと
もできないらしい。

なんのメリットもないように感じられるが、

残された家族には毎月その人が生きていた時と同じ……

……あるいはその倍以上のお金が届けられる。

もしも家族を残してワイプに殺された善良な男がいたなら、
ほとんどの人がこの道を選ぶそうだ。

「そんなものですよ、仕方のないことです」

カノンは微笑みながら言った。

——ただ俺達はその白い紙の原理や、どこから発行されているのか
を知らない。

政府の人に聞いてみてもわからないらしい。

彼等の記憶をいじっているのか、それともその瞬間だけ生命活動
をとめるのか……。

俺達はワイプを一人残らず殺す、それが役目であり、使命だ。

死体の片付けは屈辱的だが、俺らは人間だ。人間が人間を葬るの
は当然のことだろう。

「うおー……五つもあんのかよ……ご苦労なこつた」

気付くとカノンがエレンに死体……死骸を渡しているところだった。

「だが、紙四枚と交換だな。ふくろうは数にいけない、それでいいか？」

「ああ、大丈夫だ」

「ほい、四枚……これでいいんだよな？」

「ああ……それでいいはず……だよな？ カノン？」

「あんたまで……それでいいんだよバカヴァン」

「あー！ またバカつつたな！」

「バカにバカって言うて何が悪いのよバカ」

「バカバカいうなよ……泣くぞ」

「勝手に泣けば？ 泣き虫ヴァン」

「いつのご時世も強いのは女の子だねえ……ヴァンくん、頑張つてな」

エレンに同情され、なんともいえない虚しさを覚えながら俺達は引換所を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8509o/>

境界の輪廻

2010年11月11日21時04分発行